獨協中学・高校ワンダーフォーゲル部OB会30周年記念誌

2018年5月10日

巻頭に寄せて

高梨先生ご存命中ならば、私など拙い言葉ではなく、当然、高梨先生の力強いお言葉がこの巻頭を飾るはずです。それが叶わぬ今、もう半世紀以上の昔、先生に親しく接して頂いていた当時に思いを馳せつつ、私なりに責めの一端を果たしたいと思います。

私が獨協学園に勤めていたのは昭和 30 年(1955 年)4 月から昭和 37 年(1962 年)9 月までです。高校教師として着任して一年後、D.W.V.の顧問を命じられました。それまで奥多摩や丹沢を一人で又は二三人の友人と歩く程度の経験しかなかったのですが、23 歳の若気の至りで引き受けてしまいました。私が顧問をしていた 7 年足らずの間の山行は、(思い出せるままに記せば)、夏休みは横尾キャンプで槍ヶ岳・蝶ヶ岳、涸沢キャンプで穂高連峰、常念岳。蝶ヶ岳を経て横尾キャンプで槍ヶ岳、飯豊連峰主稜縦走、朝日連峰主稜縦走など。冬休みは (戸隠山系)高妻山、 (南ア)仙丈岳などでした。

いずれも、高校生を率いて歩くのは、登山経験の少ない私ごときには難役でしたが、ここが DWV のすばらしい所だと思いますが、大抵 OB たちが一人あるいは二人と特別に参加して、しっかりと山行をリードしてくれたのです。打矢さん、若井さん、井上さん、涸沢ときには更に理科室助手の金子さん等の名前が今も記憶に浮かびます。

高梨先生とは、先に記した山行のいくつかを共にしましたが、最初は飯豊山行だったと思います。先生は、諸君もご存知の如く、世評とか権威の類に無頓着で、用心することのない、人なつっこい、万人の友人というべき方で、勤務当初から私の敬愛する先輩でありました。学園祭などで先生の演出するお芝居(「三年寝太郎」「なまはげ」等)のお手伝いをするなど、日頃から親しくして頂いて、そんな折り山行の話なども口にしたのでしょう、さらりと飯豊山行に参加して下さいました。このときは、OB の若井さんも参加してくれ、磐越西線の山都駅から歩き出し、山中で二度キャンプ、天気にも恵まれた快適な山歩きで、先生もとても満足された様子でした。この山行にはすてきなオマケがつき----と申しますのは、下山して米坂線の小国駅で解散した後、高梨先生と若井さんと私の三人は、共に坂町駅に出て、そこから遥遥と小諸なる日新寮に赴き、浅間山登山も楽しんだのです。列車中の先生のお話の楽しかったこと!先生は話題豊富で、又一寸した身振りを添えた親愛なる語り口がとてもたのしい方です。念の為書き添えておきますが、先生は政治に関する姿勢は厳しい方で、いわゆる 60 年安保の時などには、先生を中心に教官室の何人もの教官が、放課後毎日のようにデモに通ったものでした。---こうした先生に教室で或いは山で薫陶を受けた諸君が、この衣鉢を今後とも末永く後輩諸君に伝えて行ってほしいと思います。

獨協学園ワンダーフォーゲル部　元顧問　奥貫晴弘

目　次

巻頭のことば　D.W.V. 元顧問　奥貫晴弘

目　次

はじめに　30周年記念誌編集委員長　柳澤孝嘉

OB会設立経緯について　打矢之威
設立集会での挨拶　高梨富士三郎

歴代会長挨拶　打矢之威　若井　永　植田一朗　佐藤八郎　井上正巳　中野　茂　冨樫克己

OB会30年の軌跡(写真集)

寄稿文　思い出

ＯＢとして DWV 冬山合宿に参加した時の思い出　打矢之威(昭和 31 年卒)
出会い　飯嶋義信(元 D.W.V.顧問)
ＯＢ会山行 御神楽岳　金　有一(元 D.W.V.顧問)
ワンゲルの思い出　滝川国勝(昭和 32 年卒)
ワンゲル部と私　菅野則一(昭和 41 年卒)
朝日連峰縦走の思い出　阿部　武(昭和 41 年卒)
Schi Heil(シーハイル)　柳澤孝嘉(昭和 49 年卒)
それは宝もの　手島達雄(昭和 47 年卒)
夏山合宿の思い出　岸　房孝(昭和 41 年卒)
山男の夫と歩んで　高梨洋子(元 D.W.V.顧問故高梨富士三郎氏夫人)
獨協学園ワンゲル部　碓井達夫(昭和 46 年卒)
創部 50 周年記念現役 OB 合同登山　金　有一(元 D.W.V.顧問)
皆様の健康をお祈りします　渡辺知也(昭和 34 年卒)
ワンゲル顧問の頃の思い出　金　有一(元 D.W.V.顧問)
Ｄ.Ｗ.Ｖ.ＯＢ会の思い出　富樫克己(昭和 43 年卒)
活動記録から　2013 年親睦会　2010 年七ヶ岳　2016 年第 32 回総会

追　悼　在りし日を偲んで

皆川完一先生　ご冥福をお祈りします　飯嶋義信(元 D.W.V.顧問)
高梨富士三郎先生　教育への情熱、生徒への愛情　飯嶋義信(元D.W.V.顧問)
故高梨先生の自然葬　金　有一(元D.W.V.顧問)
杉島佑一郎君　杉島君との想い　佐藤八郎(昭和35年卒)
彦坂震三君　彦坂震三氏の思い出　中野　茂(昭和49年卒)
植田一朗君　南アルプス・鋸岳ビバーク　常盤雪夫(昭和35年卒)
坂井　格君　ムードメーカーだった格　岸　房孝(昭和41年卒)
千野一郎君　飄々としたムードメーカー　長瀬　治(昭和43年卒)

OB会活動記録年史
D.W.V.年次山行記録5
D.W.V.卒業年別名簿

終わりに

はじめに

獨協学園ワンダーフォーゲル部OB会は1986年6月に創設され今年で32年を迎え、また、1955年に創設された獨協学園ワンダーフォーゲル部は創立63年を迎えます。

長い歴史を持つ獨協学園ワンダーフォーゲル部とOB会ですが、OBの高齢化により先達の方々の記憶や記録が薄れゆく状況にあります。幸いにも常盤雪夫氏やこの記念誌編集委員の手島達雄氏の献身的な努力によりホームページにその記録の一部は残されていますが、先達の方々の為人を記録したものは少なく、その記録を残していかなければならない必要性に迫られておりました。

そこで、2017年6月の獨協学園ワンダーフォーゲル部OB会総会で30周年記念誌の発行が提案され、満場一致で議決されました。

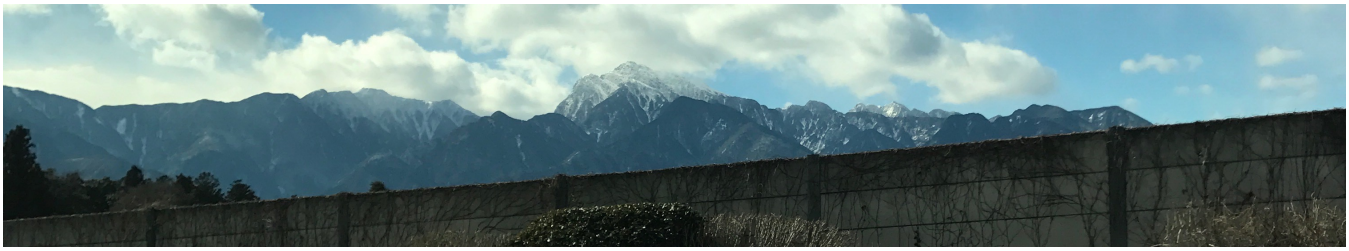
同窓会にて委員長を拝命して以来、中野　茂(49年卒の)と手島達雄(47年卒)の3名で編集委員会を組織し、1年後の総会までに発行すべく編集に当たってきました。

先輩OBや元顧問の先生方々から取材や資料提供など多面的な協力の下、この度の本誌発行に漕ぎ着けることができました。

ご多忙中の中、多くの原稿をお寄せ頂きました会員、元顧問の先生ならびにそのご家族の皆様に感謝申し上げます。特に豊富な資料ならびに写真をご提供頂きました若井　永氏、佐藤八郎氏、常盤雪夫氏、D.W.V.顧問の新村三千夫先生、巻頭の言葉をお寄せ頂きました元顧問の大貫晴弘先生に感謝申し上げます。

編集期間が実質的に10か月未満の短期間の状況のため、資料で欠落している箇所や未熟な編集部分が多々あるかと思われますが、次の40周年、50周年に向けての礎になれば幸いと思っております。

OB会30周年記念誌編集委員長　柳澤孝嘉(昭和49年卒)



獨協学園ワンダーフォーゲル部OB会の設立経緯

1985 年の 6 月ごろ、一部の OB より「独協学園ワンダーフォーゲル部も創設以来 30 年になり、また、OB の数も 100 名近くになったので、OB の親睦会を作ろうではないか」との声が出てきました。

それまでも、1956 年（昭和 31 年）～1960 年（昭和 35 年)卒業の OB は山行を同じくしていたこともあり、当時の先生方を囲んで年 1～2 回の親睦会を開催していましたし、若い OB もそれぞれの年代を中心に随時会っておりました。したがって、このような OB 会設立の声が、自然発生的に出てきたのもそれなりに理由があったことだと思います。

そこで各年代の有志が集まり、1985 年の夏から秋にかけて準備を重ね、ようやく同年 10 月 20 日（日)東京霞ヶ関ビルの東京会館”天星苑”で独協学園 WV 部 OB 会設立準備会を開催することができました。当日は OB 約 30 名、先生方も 5 名のご御出席をいただき、3 時間を超す意義のある会合が盛会のうちに行われました。なお、その席において、下記の事柄が確認されました。

1. 独協学園ワンダーフォーゲル部OB会を設立すること。
2. 会則、名簿等を作成すること。
3. 総会、幹事会を開催すること。
4. 会長として打矢之威(昭和31年卒)、その他設立準備会委員のメンバー　若井永(昭和32年卒)、井上正己(昭和32年卒)、滝 正彦(昭和36年卒)、仮屋園重雄(昭和38年卒)、中川眞之介(昭和31年卒)、中尾一成(39年卒)を幹事として選出。
5.OB設立の準備会としてこれまでの会合の余剰金を引き当てること。

以上の経緯を経て、その後幹事会が中心となり、また、昭和43年卒業の長瀬OBの全面的協力を得て、ひとまず会則案と仮名簿を作成しました。

これらはこれからOB会が発展するタタキ台として作成したものですので、まだまだ不備な点が多々あると思います。今後会員諸氏の御協力を得て、漸次、完備したものにしていきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

1986年3月1日　　獨協WV部OB会長　打矢之威

ワンダーフォーゲル部 OB 会設立集会での挨拶　　高梨冨士三郎

DWV(獨協ワンダーフォーゲル)部 OB 会の設立については、私もかなり以前から OB の諸君との集会を持ちたいと考えていましたが、なかなか実現をみませんでした。もっとも、過去に一度、鬼子母神近くの「鳥屋」の 2 階で、OB と現役の合同 集会をもったことがありましたが 1 回こっきりで終わっています。

今回、打矢氏(1956 年卒)、若井氏(’57 年卒)、井上氏(’57 年卒)、常盤氏 (’60 年卒)、中川氏(’64 年卒)、中尾氏(’64 年卒)、長瀬氏(’68 年卒)の方々が中心となり、名簿の整理やら打ち合わせ会、案内の通知から会場の準備など、それぞれの時間をさいて本日の会になったわけで、ここにあらためて、これらの方々に感謝の拍手を贈りたいと思います。

さて、私は 1960(昭和 35)年から D.W.V.の顧問をやらせていただき、約 30 年近く続けさせていただいたわけです。私の前は、ここにご出席の太田先生、富山におられる奥貫先生、私になってから飯島先生が加わり、’80 年頃から小川先生、’83 年頃から本木先生が加わって、現在は本木・清棲両先生が実際面の指導をなさっておられる。私たちは現在括弧づきの顧問ということで、仕事の関係でなかなか山行に加わることはできません。

D.W.V.として私が歩き始めた頃は、今ほど登山人口も爆発的でなく、装備も立派なもので はありませんでした。大体は、上野のアメ横で買い整えたものばかりで、D.W.V.メンバーが一堂に会すると、敗残兵かバタヤの集合みたいなスタイルでした。現在私が使っている寝袋カバーは、朝鮮戦争でアメリカ兵が使用したお古です。当時のテントや麻のザイルはかなりの重量で、冬山山行ともなればピッケル、食糧、個人や団体装備で部員諸君は 42〜43 キロは背負っていたはずです。私が参加した’60 年という年は、安保反対運動のあった年で、この年の夏山から DWV として歩き始めました。8 月には山谷で 3 千人の暴動事件があったり、流行歌では『誰よりも君を愛す』『アカシヤの雨が止むとき』が流行して、冬山のテントでは、この歌をよく聴かされたものでした。

’61 年はソ連宇宙船の地球 1 周、その翌年はキューバ危機、’64 年には、中国が原子爆弾の実験に成功、その汚染された灰が、ソ連のそれと一緒に、日本の空をおおい、その灰をふくんだ雪を、私たちは冬山(南アルプス・千丈や八ヶ岳)でとかして飲んだりしました。

ある山行のとき、某部員が、こんなことを言ったのを忘れません。山に入っているときと、下山したときの先生の顔が違うと・・・。おそらく山行中の私の顔は鬼みたいにこわかったことでしょう。冬山が終わって帰路につく列車の中では、もうつかれ果てて、口もききたくないほどでした。肉体よりも、心理的に疲れたものでした。

他校の遭難をききつつ、何度冬山はいやだったと思ったことか・・・。20 余年の間に、遭難に近いこと 2 回、夏山で錯乱した部員を押さえ抱えて途方にくれたこと 1 回、私とたった 2 人の部員とでの厳冬下での山行 1 回。交通事故で部員が死亡したこと 1 回。転落 3 回(実は 3 回のうち、今だからいうが、部員 1 人が転落した際、その知らせをきいて、駆けつけるときに私自身が転落、自力ではいあがったことが 1 回ある)。

二十余年間一人も殺さず、事故らしい事故もなくすごせたのも、幸運といえるが、これも各年度の部員諸君が頑張ってくれたおかげだと思う。

私が山を歩くのは、戦争に負け、戦後民主主義の徹底化に負け、安保反対運動で挫折し、挫折し続けてきた”負け犬”の自分が、山を歩きながら、おのれの存在をおのれ自身で確認できたこと、山はおのれのからだでおのれの意志で、生きざまをきざむことができるからである。くどいようだが、ひとりも殺さないで山を登り、山から帰ってくる。そういったことを無事に繰り返させてもらったのは、自然の中で、蟻ん子のようにへっつくばり、生き物のひとつとして、大自然に素直に従いながらそれに徹することができたからだと思う。石橋をながめ、石橋をさわり、 石橋を叩きつつ登山したことであろう。

二十余年間よくぞ協力して下さった。この席とこの時間をいただいて、あらためてお礼を申し上げたい。

「諸君ありがとうございました」。

私も肉体の限界を感じはじめる年になりつつあります。来年の 2 月で還暦を迎えます。これからは、自分のからだにあった山行を続けていきたいと思います。

本日は皆さんに会えて、本当にうれしく思います。この会が単に D.W.V.という連帯にとどまることなく、これからも各自が生き続けていく上で、人間として、山の仲間としての連帯とともに、支えあい、助け合う上での D.W.V.であってほしいと考えます。この会の発展を心から望みます。(「ワンゲル部 OB 会創設挨拶」1985 年 10 月)

リンデンバウム叢書 6　高梨冨士三郎著　「生者の繰り言」より転載

獨協学園ワンダーフォーゲル部OB会歴代会長挨拶　( )は在任期間

打矢之威　(1986 年 6 月～　　)　昭和 31 年卒

1985 年 6 月､長年の懸案であった DWV OB 会の設立機運が盛り上がり、同年 10 月東京霞ヶ関ビルの東京会館”天星苑”で OB30 名、先生方 5 名のご出席の下”獨協学園 WV 部 OB 会設立準備総会”が開催されました。まず、設立準備委員会のメンバーとして打矢之威(31 年卒)、若井　永(32 年卒)、井上正巳(32 年卒)、滝　正彦(36 年卒)、假屋園茂雄(38 年卒)、中川眞之介(39 年卒)、中尾一成(39 年卒)の各年代の OB 諸氏を選出し、打矢が初代会長役を担うことになりました。

その後紆余曲折を経て 1986 年 6 月に正式に OB 会が発足したのは各位ご承知のとおりです。

爾来毎年、6 月の総会開催と会員相互の親睦、現役の活動にも協力、或いは毎年 9 月小諸の学園寮泊まり込みバーベキュー大会など切れ目なく OB 諸氏とその家族も含めた関係者の親睦を計ってきました。

獨協学園 WV 部が創設されたのが 1955 年、OB 会が 1986 年、今年で夫々63 年と 32 年の歳月が経過したが、今日まで切れ目なくその設立趣旨を踏襲して活動してきたのは誠に立派なもので会員諸氏のご努力とご協力には心から敬意を表したいと思います。

さて OB 会の母体は言うまでもなく DWV そのものです。初期メンバーは森本悌次、加藤直之、丸山進、赤瀬　堯、打矢之威ですが、残念ながら加藤氏は 3 年前、森本氏も 2 年前に亡くなりました。若いころ一緒に山登りを楽しみ、晩年になるまで親交を重ねてきた長年の友を失う寂しさは言葉に表せません。

思い出すに高校 1 年の時、森本、加藤と 3 人で御坂山塊の三つ峠と節刀ヶ岳に登った時の富士山の雄姿に感激し何とか我々の代にワンダーフォーゲル部を作ろうと話し合ったものでした。

高校卒業後は森本は北海道大学、加藤は千葉大学、私は早稲田とそれぞれ進む方向は異なりましたが DWV 時代の初志は変わることなく夫々切磋琢磨してお互いに励まし合い、笑い合い生涯の友人として付き合ってきました。ここに幽明相隔っても培った絆は消えることはありません。

DWVOB 諸氏も、現役の若い皆さんも WV 活動、山登りの経験をとおして生涯の友人を持たれていると思いますが、なんと幸せなことか人生の糧としてこれに勝るものはありません。
DWV と DWVOB 会活動への参加により私は人生を豊かに送ってきたことを誇りに思います。

若井　永　(　　～1993 年 6 月)　昭和 32 年卒

ワンゲルOB会創立３０周年記念誌発刊にあたり第２代会長として寄稿依頼がありお引き受けいたしましたが遡って往時を思い出しても断片的には鮮明に思い浮かぶのですが今年 80 歳を迎える身にとりますと悲しいかな時系列通りには出てまいりません。記憶違いを恐れつつ老いた頭で記しましたので誤記等はご容赦ください。

自己の記録を調べたのですがいつ会長をお受けしたか判明いたしませんでした。初代会長打矢氏が国内外で事業を展開されておられ多忙だったので会長代行的な時期が続きましたことも理由の一つです。

会としての活動状況は総会と秋は秩父のハイキングと下山後は 1960 年卒故杉島氏等のお世話による飯能河原でバーベキュー親睦会、忘年会等で

したが後に秋の親睦会場は小諸の「日新寮」に移し同じく 1960 年卒の常盤氏中心に 1 泊で子豚の丸焼きバーベキュー大会、翌日は自由参加の山行が開催されるようになりましたことはご存知の方も多いと思います。そして 1993 年、私から第 3 代会長故植田氏にバトンタッチした次第です。

長期に渡り DWV の顧問を続けてくださった故高梨先生は秋の親睦会には欠かさずご出席くださいましたのも懐かしい思い出ですが、同時にこの OB 会がこのような組織になったのは先生の顧問時代と初期顧問の北村先生、太田先生、奥貫先生時代の OB との橋渡しをしてくださったことと私は思っております。

私が卒業した 1957 年から数年間の親しかった OB で山行や飲み会などで親睦を図っておりました。その頃は「OB 会」という意識ではなく同じ釜の飯を食った仲間感覚でした。
1985 年 10 月 20 日に第 1 回の OB 会総会が霞ヶ関「天星苑」で開催される運びとなったのはあるとき高梨先生とお会いした際に「先輩たちは創立初期のメンバーだけで集まっているようだ」と下の代からの声があるから纏めてはくれないかとお話をいただきました。先生の口添えで後輩達とお会いすることが叶い OB 会設立総会開催に至りこの時一本の線となりました。
しかしこの線も現在は途中で切れているといってもよいような状況にありますので是非繋がりますよう願っております。

故植田一朗　(1993 年 6 月～2000 年 6 月)　昭和 34 年卒　　中野　茂氏　寄稿

植田氏が会長を務められていたのは、記録によりますと平成５年より１２年となっています。そして次の佐藤八郎氏の会長時代（平成１２年より 17 年）を含む 10 年余りの時代が DWVOB 会の全盛期であった、と私は思っています。

現在６２才になる私が当時は３０才後半、植田氏は５０才前半。最年長の打矢氏でも還暦を迎えていない頃です。山を歩くのも、酒を飲むのも、思いのままの時期でしたから、佐藤氏の企画で毎月のように、どこかの山を歩いていました。
植田氏は自身の会社の経営に多忙でしたので、毎回参加という云う訳ではありませんでしたが、総会・親睦会へは多く参加頂きました。

小諸日新寮の親睦会で“ 仔豚の丸焼き ”を焼いていたのも、この頃です。一皮口にしただけで箸がとまる代物でしたが、写真写りが良いので狂牛病騒ぎで仕入れが出来なくなるまでかなり長く続きました。ただ一度だけ、脂が落ちてきれいに焼けた事があり、植田氏をはじめ皆さんから「今年は上手だ。」と褒められた思い出があります。今では信じられない話ですが、あの頃の親睦会では、ビールの消費量をウイスキーや日本酒を別にして、男一人辺り 3 リットルとして計算していました。小諸市内のスーパー・ジャスコで生樽 20 個注文して、「在庫がありません。」と言われた事がありました。全員が若く元気だったのです。

植田氏の話題にもどります。植田氏には妙な魅力があって、先輩後輩を問わず、「植田さんがいると嬉しい。」と、思わせる人でした。

奥鬼怒山の頂きで昼寝していた姿、徳本峠の帰り松本駅で栗おこわ弁当を仕入れてきて配ってくれた事、越後湯沢の“ うどんすき屋 ”の小部屋で熱弁されていた姿、そういった場面の数々が思い出されます。蛇足ですが、あの頃、世田谷区の尾山台駅前で偶然に神田先生と出会い、「親睦会に来てください。」と挨拶をしたところ、「植田一朗が焼いているのか。」と尋ねられたのを、今、思い出しました。
良い時代に良い人達と出会えた。その記憶が私に、あの１０余年が OB 会の全盛期だった、と思い出させるのです。

佐藤八郎　(2000 年 6 月～2005 年 6 月)　昭和 35 年卒

私が OB 会の会長になったのは、植田先輩の後、平成 12 年 6 月から平成 17 年 6 月頃迄だと思います。私が会長になっても引き続き、前会長の植田さんと同じことを行いたいと思いました。

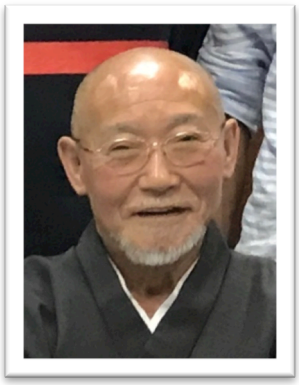
山行計画、又その他の行事に専念することが会の発展に寄与すると思いまして、会長を引き受けました。最初の頃は日帰りの山行で、奥多摩、奥武蔵の峰々で安全な山行ばかりでした。後日、一人の後輩から 1 泊もしくは 2 泊の山行を企画してくださいとの提案があり、初めての日新寮での一泊の素泊まりを行いました。その夜の酒宴は常磐館でした。

その後、2 泊 3 日の山行になると大体 5 月の連休となったこともあり、まだまだ残雪も多く登れる山も限られていたので、宿や交通機関の手配を含めて探すのが大変でした。私が会長になって、少々強引かもしれない会の運営を行ったことで、一人の後輩からビックリする様な文句が出たのには少々驚きでしたが、今思えば笑い話の様なものでした。

さて、OB 会の最大のイベントは日新寮の秋の親睦会。計画は簡単でしたが、準備は大変でした。特に料理のレシピは常盤君が受けてくれました。庭でバーベキューの設営は朝早くから寮についた男達が行い、調理は先輩後輩、又参加された御婦人達が美味酒宴の料理を作って頂いたことに大変感謝しました。

それから、常盤君、杉島君、中野君の御三方の奮闘にはとても有り難く思っています。
最後に OB と現役間の密なる関係を現会長にお願いしたいと思います。

井上正巳　(2005 年 6 月～2010 年 6 月)　昭和 32 年卒



2017 年 12 月 10 日、ハワイホノルルマラソンに”参加して”と書くと皆様びっくりすると思うので、”応援に参加して”と訂正します。
義弟が古希を記念して初めて 42.195Km(26 マイル)に挑戦するので応援方々オワフ島、マウイ島、ハワイ島(9 日間)に誘われたが長時間の飛行機は嫌いで今まで海外旅行は 1 度も無し(操縦席なら OK)。一方ならぬ事情が有るとの事でこの話に乗っかり、飛行機にも乗っかる事にした。
ハワイの 12 月の最高気温は 28℃、最低 21℃。服装は、半袖。これは着物好きな私にとつては夏物の単衣を 2 着、長襦袢 2 枚、角帯 1 本、夏足袋 2 足、下駄等普通の人なら余分な荷物を旅行ケースに入れていざ出発。現地では「ステキ!」「格好いい」「粋だね」と云われ短足胴長の小生、得意満面。12 月の降水確率 74%のハワイで 1 回の雨もなく、晴れ男の面目躍如。ただ悲しい事にダイヤモンドヘッドの最後の 99 段は人の登り降りが激しく何回も休むと迷惑なので断念。もう山登りは駄目だ。

私の会長時代 5 年間で佐藤八郎計画立案の山行 25 回(釣り 1 回網代温泉)参加しました。欠席 2 回でした。八郎さん御苦労お掛けしました。そういう訳で私の 5 年間はただ参加するのみ。特に思い出深いのは八郎さん会長時代 2003 ワンダーフォーゲル部創部 50 周年 OB、現役北海道大雪山旭岳【2,291m】登山。現役 10 名、若手 OB 3 名、先生 2 名、古参 OB 4 名、カミサン 1 名。総勢 20 名。但し全員が一緒に登った訳では無く古参連中は 1 日早く東京を発ち旭川空港でレンタカーを借り、快晴の富良野、北美瑛、天人峡を回り翌朝早々にロープウェイで姿見駅から出発。距離 9.5Km 高低差 799m、2 時間 20 分かけて旭岳山頂。待つ事 1 時間中岳分岐のあたりに重量のキスリングを背負った後輩諸君を見つけた。

なにしろ早い。若さが羨ましい。雄大な眺めの旭岳山頂での現役、OB の記念写真撮影。ヤッタゼ!!
　若者と先生の 15 名は間宮岳【2,185m】、北海岳【2,149m】、白雲岳【2,230m】、緑岳【2,019m】と縦走し大雪高原温泉に下山。古参５人はレンタカーで層雲峡、野付半島、女満別、網走、知床、羅臼、標津、納沙布、弟子屈、摩周湖、阿寒、十勝、夕張、千歳空港の全行程 1,227.8 キロ。空港にて事故、ケガもなく再会。

最後に若き OB 諸君、OB 会の参加を期待しています。

中野　茂　(2010 年６月～2016 年６月)　昭和 49 年卒

　私が会長に就きましたのは、平成２２年６月でした。本来ならば坂井格氏が会長に就く予定で内諾を得ていたのですが、総会の直前に坂井氏が入院を余儀なくされ、急遽。代役として就任した訳です。しかし、その頃の私は会計と案内状発送事務を勤めていたので、「両方ともは嫌だな。」と思っていた所、常盤雪夫氏より「会計と庶務は俺が引き受ける。」と言って頂きましたので、安心して会長に就いた次第です。

　それから、平成２８年まで会長職にいましたが、運悪く親父の末期と重なってしまい、催しへの参加は減ってしまいました。飛び切り軽い神輿を自認していましたけど、いないのでは話になりません。不在の会は殆ど常盤氏にお任せしてしまい、本文を以って改めてお礼申し上げます。

　OB 会についてですが、１５年ほど前に銀座に有った“ 獨協倶楽部 ”を会場にしていた時期がありました。その折に接待係の女性から「これほど、上下仲の良い会はありません。素晴らしい会です。」と褒められた事があります。しかしながら、この“ 仲が良い ”というより、むしろ“ 良すぎる ”といった関係が、逆に一種、閉鎖的な会を作ってしまったのではないかと思うところがあります。

　現状の OB 会は、若輩者だった私が６０を超えてしまいました。若手の参加も度々ありましたが、常連となるには至っていません。世代の切れ目が大き過ぎたというのが勝手な分析ですが、それよりも、「OB 会は、山歩いて酒飲んでワッハッハーで良いんだ」と言う私の姿勢が受け入れられなかったのかもしれません。愚痴な話になりまして、すみません。とくに現在、現役を含めた若い世代との交流を図って目白の校舎に足を運ばれている、富樫現会長をはじめとする方々に、ありがたく思っております。

富樫　克己　(平成 16 年６月～現任)　昭和 43 年卒

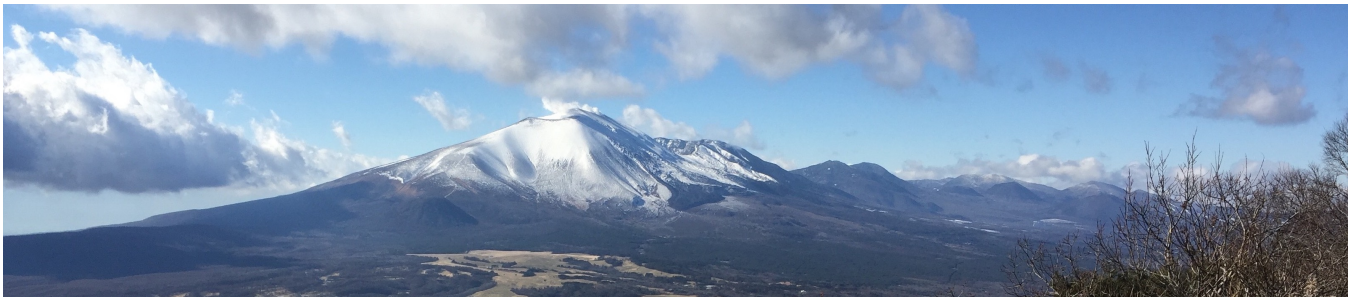
　この度、D.W.V.ＯＢ会３０周年記念誌の刊行となり大変喜ばしく思います。

　１９８５年１０月、霞が関ビルで創部の礎を築いた打矢先輩のリーダーシップのもと、ＯＢ会がスタートしました。私はその後のＯＢ会に参加させていただきましたが何よりも小諸、日新寮の「秋の親睦会」がその最初の機会になりました。中学時代の林間学校の記憶があったからです。初めて会うＯＢの方々の中に高梨、飯嶋、神林先生がいました。そして、あの時代から長い年月に思いを馳せました。上野から夜行列車で左沢駅に着き、明け方の土砂崩れトロッコ線を歩き始めた朝日連峰縦走は私に達成感を与えてくれましたし、その未知の世界を経験させていただいた高梨、飯島先

生には今でも感謝しております。

その後、数々のＯＢ会のイベントに参加させていただきました。日帰り山行や泊りがけの大きなイベントもありました。七が岳、会津駒ケ岳、四阿山などのほかに日光白根山は感動的でした。獨協卒業後はそれほど山行もせずそもそもマニアックに登山していたわけでもない私にはＯＢ会で企画された渋い山々にはシビレました。これに刺激されて個人的な山行を始め百名山も含めいくつかの山々にも登りました。これらの動機には熱心なＯＢの方々が熱意をもってＯＢ会を盛り上げた努力がありました。思うに中高年登山の先駆け？今の登山ブームの先駆けだったか？年相応の山、しかし決して初心者ではないセレクトがありました。これはやはり昔から獨協が持つ男子校のダンディズムが背景にある？他より早くトレンドは掴みそれも獨協流のアレンジを必ずしているという感じでしょうか。

スキーにも行きました。そもそもＯＢ達の学生時代はスキーブームでありました。先日、ＤＷＶアーカイブスでも昭和３７年５月連休の飯豊の山スキーなどの記事もありましたが当時こんな事をしていたのは、ほんの一部の人たちとませた獨協生くらいだったと思われます。越後湯沢、丸山高原、みつまた/かぐら等のＯＢゆかりの宿に泊まり昔の一級ＯＢとも滑る機会がありました。また、昭和３５年卒のクナイスル杉島先輩の民宿で親睦会の後、伊豆が岳など登った事もありました。

昨年から昭和４７年卒、手島さん尽力によるＯＢ会ホームページ作成により過去のデータも公開されるようになりました。昔の山行はそれなりに興味深いのですがＯＢ会データの中に昭和４９年卒の中野さんの名前が必ずある事です。私の経験からＯＢ会というものは５年単位くらいで熱心な会員がいないと若い人に継続されにくいと思います。ＯＢ会が今後、存続するにはこういう後輩達の存在が大きいと思われます。さらに言えば、レガシー(遺産)？若い人を惹き付ける金字塔が欲しい．．ヒマラヤやヨーロッパアルプス遠征とか。今の現役は文化人類学的フィールドワーク中心？ＯＢでも求めるものはそれぞれ異なっておりその名の通り「渡り鳥」トレイル的なものを目指していたヒトやサミット(最高)、著名な山のアルピニズム登山を目指していたヒトなど(カッコイイを目指していたヒトも?)バリエーションがあって良いと思います。今回のように記念誌出版などの企画も大歓迎です。

いずれにせよ新たなＯＢ会が３０年間、今日まで継続してきた事に奇跡を感じると共に今後ともに発展する事を願っております。人生を豊かにしてくれたＤ.Ｗ.Ｖ.にダンケシェーン．．。